

令和 6 年 6 月 6 日現在

機関番号：32665

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K02612

研究課題名（和文）通常学級の課題が見られる児童生徒の指導における教師の実践知と指導方法の検討

研究課題名（英文）Examination of Practical Knowledge and Teaching Methods for Students with Psychological Problems in Regular Classes

研究代表者

土屋 弥生（TSUCHIYA, Yayoi）

日本大学・文理学部・教授

研究者番号：80822246

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究では、教師が児童生徒の本質をとらえるためには現象学的な意味で自然的態度から超越論的態度への態度変更をおこなうことと、児童生徒の「主体性」そのものを受けとめ、児童生徒独自の「世界（Welt）」を理解するという人間学的理解が重要であることが解明された。

さらに現象学的・人間学的視座から新たな指導方法が構築され、ASDの児童生徒の指導方法として現象学的な発生的分析を用いて「回り道」を考案する方法や、緘黙傾向の児童生徒の受動的世界の理解による指導方法が解明された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

教育実践の現場では多様な課題や問題を抱える児童生徒が見られるが、これらの児童生徒の指導にあたる現場の教師は多忙な状況の中で困難な状態におかれている。本研究では、現象学的・人間学的方法を用いた新たな研究視座から教育現場における実践に役立つ知見が得られた。本研究の成果である通常学級の不登校や不適応状態の児童生徒、発達障害やメンタルヘルスの問題を抱える児童生徒の指導方法は、今後の学校教育現場での教育実践と新たな教師養成教育において役立てられると考える。

研究成果の概要（英文）：In this study, it was clarified that for teachers to grasp the essence of students, it is important for them to change “Natural Attitude” to “Transcendental Attitude”. It was also clarified that it is important for teachers to accept the “Subject” of students, and to understand the students' own “world (Welt)” in the anthropological sense.

Furthermore, new teaching methods were constructed from a phenomenological and anthropological perspective, and the method of devising a “detour” for teaching students with ASD using phenomenological developmental analysis and the method of teaching by understanding the passive world of students with mutism were elucidated.

研究分野：現象学的教育学、人間学的教育学、臨床教育学

キーワード：現象学的教育学 人間学的教育学 実践知 本質直観 パトス 発生的分析

1. 研究開始当初の背景

学校教育の現場には実践における問題や課題が山積しており、通常学級における特別な教育的配慮を必要とする生徒のありようには多様性が見られ、不登校、発達障害、多くのメンタルヘルスの問題（精神障害、心身症）など、児童生徒に見られる問題や課題は多岐にわたっていた。文部科学省の調査（平成24年）によれば、通常学級において発達に課題が見られる児童生徒は6.5%（令和4年の調査では8.8%）を占め、中学校段階における不登校生徒は全体の3%を超えていた。

これらの児童生徒への指導や対応については、特別支援教育の分野での知見も生かされるところであるが、多くの理論、統計を背景とした教職員研修がおこなわれているものの、現場の教育実践においては、教師たちにとっての「何をどのように考え、実際にどのようにすればよいのか」という現実的な問題は克服されていないという現状があった。また、課題が見られる児童生徒の指導については主に心理学の知見を活用することがおこなわれてきているが、自然科学的立場に根ざしたアプローチの限界もあり、多様な様相を帯びる教育事象との乖離が問題となる。結局、教育現場では「心理学の知見は参考にはなるが、心理学的理解のみでは現実の児童生徒の指導の問題は克服できない」という葛藤が生じるようになった。

コルトハーヘンはその著書『教師教育学』において、教育研究や実践における科学的パラダイムが支配的な状況を批判し、理論と実践の乖離について、学問知を教育実践にうまく促せていない、既存の形式化された知識を実践に「適用」という理論パラダイムの問題点を指摘している。また、油布佐和子は「実践知」は、学びとるべき知識や知識の体系というよりは、それをどのように活用するのかという「操作能力」のことなので、認知的活動の結果としての知識を実践知とイコールだとみなすのは誤っているとしている（「実践知を創造する - 新たな教師教育を求めて - 」『学校教育研究 33』, 2018）。すなわち教師の実践知とは、理論や知識を背景としつつも、教師が対面する生徒の特性や状況を読み解き、個別のケースごとにそのとき最も有効である対応や指導を構築し、実践していくための「知と行為が一体となったもの」なのである。このような実践知について本研究では、教育事象そのものの解明のために、人間存在そのものに着目し、「事象そのもの」の考察を目指す現象学および人間学的な教育学の立場を用いて検討を試みることにした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、実際の教育現場での指導実践に役に立つ実践知を現象学的・人間学的な立場から明らかにし、それを用いた指導方法を実際の教育現場で起こり得る指導場面の事例分析を通して構築し、教育現場に寄与することであった。

（1）教育現場での指導実践に役に立つ実践知の構造と在り方を解明する。

（2）（1）で明らかにされた実践知を用いて行う生徒指導の方法を解明し、具体的な指導方法構築をおこなう。

3. 研究の方法

（1）理論研究として教育現場における諸問題に対応する教師の実践知についての先行研究の文献収集と分析をおこない、これまでの実践知研究の成果を明らかにする。さらに、現象学、人間学の教育実践研究における有用性を明らかにしたうえで、これまでの実践知研究の成果に対してフッサール現象学とヴァイツゼッカー（Weizsäcker, V.v.）の医学的人間学を分析視座として検討を加える。この検討を通して、教育現場における教師の実践知を新たな視座から捉え直し、事例検討のための理論的基盤を構築する。

（2）（1）で明らかにされた教育現場における実践知を基盤に、ヴァイツゼッカーのパトス学を用いた生徒理解のためのパトス分析を多くの事例を対象におこない、実践知を基盤とした生徒指導の方法を導き出す。課題が見られる児童生徒の指導事例を現象学的・人間学的な立場から捉え直し、事例の指導過程における一般性を有した実践知と指導方法を明らかにする。

（3）（1）・（2）の成果をふまえ、現職の教師たちが抱える具体的な指導事例の検討を研究代表者が所属する日本大学文理学部教職センターが実施している「教育実践力研究会（事例検討を中心に年に数回実施・現職の教師が多数参加）」において実施する。参加する現職の教師たちの具体的な指導事例における課題について聴き取り、現場において指導が困難な事例について現象学的・人間学的な観点から分析をおこなう。

4. 研究成果

（1）教育現場での指導実践に役に立つ実践知について、フッサール（Husserl, E.）現象学を理論的な基盤とした先行研究を整理、検討した。研究の結果、生徒を理解する際の豊かさと深さについては、フッサール現象学の「直接経験」における「我汝連関」が基盤となり、「本質直観」

の方法が有効であることが明らかになった。この本質直観分析によって生徒行動の様相変動が、「動機づけ連関」から教師の間主観的な感知・共感能力によってノエシス契機の実的分析として解明される。このような児童生徒理解のための現象学的分析枠組みは、教師が児童生徒理解をおこなうための基盤を成すことがわかった。(土屋弥生「生徒理解におけるフッサール現象学の意義」『臨床教育学研究』第9巻, 2021年, 126-137)

(2)教育現場での指導実践に役に立つ実践知について、ヴァイツゼッカーのパトス学を基盤とした先行研究を整理、検討した。パトス的な価値感覚の働く感情は客観的状況理解によっては理解できないため、児童生徒の状況に向き合ったとき、教師はパトス分析を主題化せざるを得ないことから、教育実践におけるパトス分析の有用性が明らかになった。教師には、児童生徒の決断を促すパトスのための環境整備や児童生徒のパトス不均衡の調整が求められることがわかった。(土屋弥生「児童生徒理解のための人間学的パトス分析 - 『生徒指導提要』との関連から - 」『教師教育と実践知』第4巻, 2019年, 11-18)

(3)教育現場での指導実践に役に立つ実践知の構造と在り方を解明するにあたり、「練習」の現象学的分析をおこなった。ボルノウ(Bollnow, O.F.)によって示された「練習」の意義を現象学的視座から再検討することによって、練習の本来的意義を明らかにすることを目指した。この目的の達成のためにまず、ボルノウが人間学的な視座から見た『練習の精神』のねらいを整理することによってボルノウが明らかにした「練習」の教育的意義を確認し、さらに、それに対する先行研究を概観することによって『練習の精神』における残された課題を確認した。次に、ボルノウの「人間学的に見た教育学」における現象学、とりわけフッサール(Husserl, E.)現象学における発生的現象学の位置づけを確認し、この発生的現象学の視座から捉えなおした「練習」の教育的意義を検討した。「練習」には自己が練習内容と「対話」しながら、その「やり方」(Bewegungsweise)の自在化の極みを無限に追究するという意味での脱目的な内在目的論的価値が存在することが明らかにされ、そこにこそボルノウの言う「内面の自由」に至るための教育が存在していることが確認された。(土屋弥生「身体活動を伴う学びにおける「練習」の意義に関する現象学的考察 - ボルノウ『練習の精神』の批判的検討から - 」『教育方法学研究』第47巻, 2022年, 25-34)

(4)(1)・(2)における研究成果をもとに、明らかにされた実践知を用いて行う生徒指導の方法を解明し、具体的な指導方法構築をおこなうことを目指した。まず、通常学級にも在籍する発達障害の児童生徒への指導や対応の方法の検討として、自閉症スペクトラム障害(ASD)の可能性のある児童生徒の指導のあり方について、現象学的人間学の視座から解明することを目的とした。研究の結果、ASDの可能性のある児童生徒の指導において重要なのは、児童生徒一人ひとりの「世界」の全体的な理解であり、さまざまな問題が発生したときには特に、このような児童生徒の全体としての「世界」のあり方、言い換えればその都度の「主体性」を捉えることが重要となることが明らかになった。教師は「ASDの児童生徒の指導に必要なマニュアル」に沿った指導にとどまることなく、現象学的人間学を基盤とした精神病理学者である深尾の言う「かのような了解」に基づく、ヴァイツゼッカーの意味での主体性に着目した人間学的な教育実践を目指す必要があることが確認された。そして、このようなASDの可能性のある児童生徒の教育的理解は、これまでの課題を解決する有効な指導をスタートするための思考枠組みとして機能することになることが明らかにされた。(土屋弥生「自閉症スペクトラム障害の可能性のある児童生徒を主体性の形成からみた指導 - 現象学的人間学の視座から - 」『学校教育研究』第36巻, 2021年, 78-89)

(5)(1)・(2)における研究成果をもとに、明らかにされた実践知を用いて行う生徒指導の方法を解明し、具体的な指導方法構築をおこなうことを目指し、通常学級にも在籍する緘黙傾向が見られる児童生徒への指導や対応の方法について現象学的・人間学的視座により検討をおこなった。その結果、緘黙傾向の児童生徒の理解において重要なのは、まずこのような児童生徒に対して超越論的態度(現象学的態度)で向き合うことである。そして、超越論的態度によって緘黙傾向の児童生徒とのあいだに形成される受動的世界に注目し、両者のあいだにある「雰囲気的なもの」を感知する。この「雰囲気的なもの」には、緘黙傾向の児童生徒を前にした教師自らの身体に生じる気分によって把握することのできる緘黙傾向の児童生徒の受動的志向性としての気配が存在する。教師には、この気配の意味することを把握することが重要となる。そして、この把握された意味が、緘黙傾向の児童生徒に対する効果的な指導の出発点となる。このような現象学的な実践的思考により、緘黙という世界を生きる児童生徒とより深く向き合い、理解し、指導をおこなうことが可能となることがわかった。(土屋弥生「緘黙傾向が見られる児童生徒の理解に関する現象学的一考察」『学校教育研究』第37巻, 2022年, 86-98)

(6)(1)・(3)の研究成果に基づき、自閉症スペクトラム(ASD)傾向のある児童生徒に対する現象学的な発生的分析の方法を用いた新たな指導方法を提示することを目指した。ASDの児童生徒の指導においては、まず個々の特徴をふまえたうえで、それまでの教師自身と児童生徒のあいだに形成された経験をもとに、ASDの児童生徒が歩むことができる「道」を想起する必要がある

る。そして、この想起した「道」を構成するさまざまな「意味」の連関を現象学的な発生的分析の方法を用いて検討し、ASD の児童生徒の引っ掛かりを構成する意味を迂回して歩むことのできる「回り道」を考案する。さらに具体的な指導方法の構築のために、教師自身がこの「回り道」を代行して歩むことによって、「回り道」の妥当性を検証することが求められる。本研究では、指導方法構築のための手順と枠組みが明らかにされた。(土屋弥生「自閉症スペクトラム傾向のある児童生徒の指導方法に関する現象学的一考察」『生徒指導学研究』第 21 号,2022 年,55-64)

<参考文献>

- コルトハーヘン,F.(武田信子監訳,今泉友里・鈴木悠太・山辺恵理子訳)『教師教育学 理論と実践をつなぐリアリスティック・アプローチ』学文社,2010
- 土屋弥生「児童生徒理解のための人間学的パトス分析 - 『生徒指導提要』との関連から - 」『教師教育と実践知』第 4 巻,2019 年,11-18
- 土屋弥生「生徒理解におけるフッサー現象学の意義」『臨床教育学研究』第 9 巻,2021 年,126-137
- 土屋弥生「身体活動を伴う学びにおける「練習」の意義に関する現象学的考察 - ボルノウ『練習の精神』の批判的検討から - 」『教育方法学研究』第 47 巻,2022 年,25-34
- 土屋弥生「自閉症スペクトラム障害の可能性のある児童生徒を主体性の形成からみた指導 - 現象学的人間学の視座から - 」『学校教育研究』第 36 巻,2021 年,78-89
- 土屋弥生「緘黙傾向が見られる児童生徒の理解に関する現象学的一考察」『学校教育研究』第 37 巻,2022 年,86-98
- 土屋弥生「自閉症スペクトラム傾向のある児童生徒の指導方法に関する現象学的一考察」『生徒指導学研究』第 21 号,2022 年,55-64
- 土屋弥生『教師と保護者のための子ども理解の現象学』八千代出版,2023 年
- 油布佐和子「実践知を創造する - 新たな教師教育を求めて - 」『学校教育研究』第 33 巻,2018 年,48-60

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 7件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 土屋 弥生	4. 巻 21
2. 論文標題 自閉症スペクトラム傾向のある児童生徒の指導方法に関する現象学的一考察	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 生徒指導学研究	6. 最初と最後の頁 55-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 土屋 弥生	4. 巻 37
2. 論文標題 緘黙傾向が見られる児童生徒の理解に関する現象学的一考察	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 学校教育研究	6. 最初と最後の頁 86-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 土屋 弥生	4. 巻 2
2. 論文標題 体験学習の実践知に関する大学地域連携学的一考察 - 学校におけるインターンシップやボランティアを例にして -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 大学地域連携学研究	6. 最初と最後の頁 40-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 土屋 弥生	4. 巻 7
2. 論文標題 不登校児童生徒の指導の方法に関する現象学的人間学的一考察	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 教師教育と実践知	6. 最初と最後の頁 15-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1．著者名 土屋 弥生	4．巻 36
2．論文標題 自閉症スペクトラム障害の可能性のある児童生徒を主体性の形成からみた指導 - 現象学的人間学の視座から -	5．発行年 2021年
3．雑誌名 学校教育研究	6．最初と最後の頁 78-89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20576/bojase.C3606	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1．著者名 土屋 弥生	4．巻 47
2．論文標題 身体活動を伴う学びにおける「練習」の意義に関する現象学的考察 - ボルノウ『練習の精神』の批判的検討から -	5．発行年 2022年
3．雑誌名 教育方法学研究	6．最初と最後の頁 25-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18971/nasemjournal.47.0_25	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1．著者名 土屋 弥生	4．巻 1
2．論文標題 教職志望学生の効果的な現場体験学習のあり方について：地域・学校・大学の連携の重要性	5．発行年 2022年
3．雑誌名 大学地域連携学研究	6．最初と最後の頁 14-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 1件／うち国際学会 0件）

1．発表者名 土屋 弥生
2．発表標題 教育相談における現象学的・人間学的視点の導入の試み
3．学会等名 日本生徒指導学会
4．発表年 2023年

1．発表者名 土屋 弥生
2．発表標題 自閉スペクトラム症（ASD）の児童生徒の現象学的運動指導
3．学会等名 日本学校教育学会第37回大会
4．発表年 2023年

1．発表者名 土屋 弥生
2．発表標題 子どもの自己肯定感を高めるための教育について考える（学校・地域・家庭）- 子どもと向き合い，働きかける方法を具体的に考案する
3．学会等名 大学地域連携学会
4．発表年 2023年

1．発表者名 土屋 弥生
2．発表標題 不登校児童生徒の身体性に着目した指導についての人間学的一考察
3．学会等名 日本臨床教育学会
4．発表年 2022年

1．発表者名 土屋 弥生
2．発表標題 大学と地域の連携に基づく大学生の体験学習における課題 - 教職ボランティア・教職インターンシップを対象として -
3．学会等名 大学地域連携学会
4．発表年 2022年

1．発表者名 土屋 弥生
2．発表標題 緘黙傾向が見られる児童生徒に対する現象学的・人間学的教育相談の方法
3．学会等名 日本学校教育学会
4．発表年 2021年

1．発表者名 土屋 弥生
2．発表標題 発達障害の生徒の指導における現象学的な発生的分析を用いた方法について
3．学会等名 教育実践学会
4．発表年 2021年

1．発表者名 土屋 弥生
2．発表標題 教師のリカレント教育における大学の果たす役割 - 日本大学文理学部「教育実践力研究会」の試み -
3．学会等名 大学地域連携学会
4．発表年 2022年

1．発表者名 土屋 弥生
2．発表標題 大学と地域の連携に基づく大学生の体験学習における課題 - 教職ボランティア・教職インターンシップを対象として -
3．学会等名 大学地域連携学会（招待講演）
4．発表年 2022年

〔図書〕 計2件

1．著者名 土屋 弥生	4．発行年 2023年
2．出版社 八千代出版	5．総ページ数 175
3．書名 教師と保護者のための子ども理解の現象学	

1．著者名 望月由起、劉麗鳳編著（土屋弥生 第3章、第4章分担執筆）	4．発行年 2024年
2．出版社 学事出版	5．総ページ数 216
3．書名 教師を目指す人たちのための生徒指導・教育相談	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------